子どもをどうみるか（下）

――K君の怒りから――

山崎　徹

六年生の五月末、K君は算数の授業の時、私のやり方に反発し、いすから立ち上がり抗議した。計算の班競争をしていたのであるが、一番悪かった班に私が屈辱的な方法――班四人の名前の書いたマグネットを見せしめ的に一番下に下げた――をとったことが原因である。K君の怒りは当然である。L君は次の日の日記に次のように書いてきた。

先生に言います。先生は、はっきり言ってうそつきです。五年生の初め、
「ばつとか、きょうそうとかは先生はきらいだ。だからばつとかきょうそうはやらない。」
と言ったはずなのに、グランド何周や反省文をやりました。そのたびに、だれかがそういうのはやめた方がいいと言って、けっきょくやめになったけど、六年生になってからまたはじまりました。まず最初は、はん長にはんせい文をかかせることです。これはついこの間までやっていました。はんの人がわすれものをすると、そのはんのはん長がはんせい文をかかなくては、いけなかったことです。これもやめました。もう三回も、うそをついたわけです。

そして、こんどは今日、計算ドリルで、はんごとにきょうそうしたことです。8位だった7はんをずっと下にさげたのでKくんがおこったんだと思います。ぼくもK君と同じ気もちがします。明日、学級会があるのでそのとき、K君の意見に

賛成します。

（L君）

(一)　「具体的情勢の具体的分析」ということを

私はこの子どもたちを担任したとき、

①一人ひとりが、人間としての本当の生きぬいていく力をつけていってほしい、つまり、「自立」へと成長していってほしい

②子どもどうしがお互いを大切にし、やさしさと連帯感にあふれた集団をつくりあげていってほしい

と願っていた。このような観点で子どもたちを見たとき、子どもどうしのお互いの無関心、とりわけ学力の低いSさん、Tさんに対する他の子どもたちの無視したような態度、かかわり方を何とかしなければ、と考えていた。そして、今までの教師生活の経験から、班競争という方法が有効と考え、この事件以前にもたびたびいろいろな場面で班競争を組織してきた。しかし、結果は必ずしもよくはなかった。それは、第一に子どもたちの中に班競争を受け入れる土壌が形成されていなかったからである。つまり友好的な競争関係という子ども集団が作られていなかったのである。その見とりが不十分なまま、子どもたちを今まで担任してきた子どもたちと比較して見たり、結果を急ぎすぎたりして、結局、子どもたちに反発を受けるような方法を時にはとってしまったのである。この事件の以前にも、以下のような反省が学級通信「手と手」で述べられていたのではあるが。

また、学校全体としても、善意ではあろうが、「バツとしてのろう下ふき」「バツとしてのグランド何周」「バツとしての階段何往復」「シールによる評価――全面的には否定しないが」などが目につき、それらに対する機械的な反発が、逆に私をしてそのような方法をとらせてしまったという一面もあることはあるのだが……。

私はこの事件を通して、「具体的情勢の具体的分析」ということが、子どもを見る時に決定的に大切なのだということを学んだ。それは、ある願望や経験との比較から子どもを見るのではなく、自分の目の前にいる子どもを、現実のありのままの姿として見、その現実を受け入れるということである。そしてその現実の姿の中から子どもたちの成長の方向と、実践の方策をさぐらなければいけないということである。

子どもは多様であり、子ども集団も多様である。だから実践も多様でなくてはならない。そのためにも、子どもの現実の姿をありのままに見、受け入れること――これが実践の出発点とならなくてはならない。

K君の怒りの翌日、学級会を開いた。私が提案者となり、……重い、重い学級会だった。結論は出なかった。いや、結論はこれからみんなで出していくことを誓った学級会だった。

手と手

No77. 1987. 1. 9
令和5年 上崎学級

原点にかえって……『人間を育てるということ』

きのうの始業式に、"先生に対する要望、直してほしいこと"ということで作文を書いてもらいました。そのいくつかを紹介します。

一久くん：算数でばっぱ、ばっぱと進むのはやめて下さい。わかる人、わからない人は、ばっぱ、ばっぱと進むと、そいっきりわからなくて、進むことができなくなります。

佳樹さん：先生は分かってだと思う。なぜかというと、勉強でわからない人がいるというのに、勉強がおくれているといって、はやくすすむからである。……いくら勉強がおくれていても、まえのようにみんながわかって分から進んだほうがいいと思う。

直子さん：分からない子がいるのに、どんどん進まないでほしいです。そんなにはなはないように、ちゃんと進めるように考えて下さい。

以前、みんなの欠点の1つとして、『思いやりややさしさに欠けるところがあるようだ』と書いたことがあります。そういう点を、一久くんたちの書いてくれたことは、とてもうれしいことです。みんなが本来持っている"やさしさ"を引き出し、組織し、より伸ばしてやる先生の力が不足していたのでしょう。

原点に立ちかえり、基本的なことは、どの子もしっかりと身に付けてから次に進むようにしましょう。でも、みんなも、助け合い、はげまし合い、教え合って、みんなの力でも、どの子もわかるようにがんばって下さい。やさしく、思いやりのある子に!

麻衣子さん：はんの人がわすれものをしたとき、反省文を書かせるのはやめて下さい。

実生さん：反省文とか、グランド○周は、ぜったいやらないで下さい。どうしてもやらなければいけないときは、別な方法を自分で考えて下さい。

珠美さん：直してもらいたいことは、グランド○周ということです。先生のことだけう、もう言われないとおもうけど、それはぜったい直して下さい。

泰子さん：こくばんに『泰子』とかいろいろな名前を書かないで下さい。わかるはずかしいからです。

紀子さん：わたし物をすると反省文とかいうけど、わすれたくてわすれたのじゃないのだから、反省文はやめて下さい。

山真野さん：マラソンとか反省文とかをやらせないで下さい。

罰や理屈ではなく……結局は1人ひとりの本当の自立した力になりなくてはと願い、1学期は上記のようなことは1回もしませんでした。グランド○周(やったのは教師10年で初めてです。)は、そんなやり方をなくてもしっかりしてほしいと願いながらもやりました。反省文は、他の子のことも心に入れて考えてほしいと願ってやりました。もうしません。みんなを信じましょう。多少、時間はかかっても、自分で判断できる、そんな自律、自立するみんなの手助けをきめ細かくしましょう。みんなも、1人ひとり、また集団として、罰や恥をなくすこと、理屈ではなく、道理に対するべきかの納得によって動ける、そんな力、やり方を身につけて下さい。

達一くん：大きい声でどなるのは、思いやりがないと思います。

英晴くん：注意する時、あまり大きな声をだすのは直してほしい。

先生にも言いたいことはありますが、とにかく、頭ごなしにしかるのは反省します。

真摯な人 ⇒ 授頭の毛を立てないで(佐竹さん) たばこをすわないように(田山さん、真子さん、泰子さん)
めがねを上げて(真子さん、由美さん) 上目づかい(紀子さん、海真理子さん)
くしゃみの音がすごく大きい(ゆくみさん) まわりさんとけんかをしないで(紀子さん)

(二)　子どもの願いから

K君の怒りの中には子どもの正当な願いがこめられている。子どもの願いを私に対する評価と、クラスをどのように評価しているのかということで見てみよう。

先生のいいところは、わからないところを、何回も教えてくれるところです。わたしがわり算がわからないときは、わざわざ学校へ来てくれて教えて、わり算ができるようになりました。（多紀子）

よいところは、みんながべんきょうをわかってから次のところにすすむことがよいところだと思います。（由美）

先生に対して続けてほしいのは、わからない人がわかるまでじっくり教えるところを続けてほしいです。（珠美）

先生に続けてほしいところは、バッとかをしないで、その場でぴしゃっとおこるというところです。（聡美）

いつもわからない人がいるとまえにすすまないことがいいことだと思います。その人ばかりわからないままになるからです。（七宏）

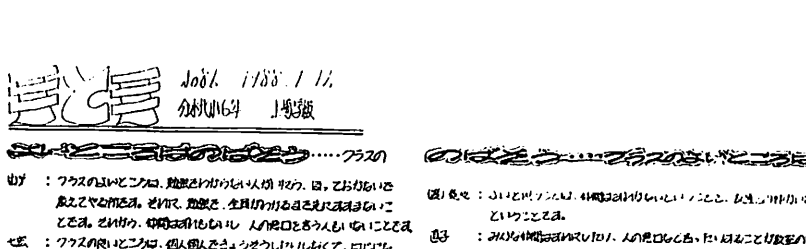
続けてほしいことは、ばつやおしおきなどやらないことです。（めぐみ）

ずっと続けてほしいことは、ばつをあたえないことです。（海　真理子）

子どもたちは、「勉強をわかりたい。」「友だちと仲よくし、共に伸びて行きたい」という願いをもっている。五年生になって、初めて友だちができ、勉強もみんなといっしょにやれるようになったというFさんは、六年生の二学期をふり返り、次のように書いている。

「わたしが二学期がんばったこと、よくできたことは、算数ができるようになったことです。わたしは、一学期と比べてよくできるようになったなあ、と思います。助け合い班学習をしたからです。友だちからわからないところを教えてもらって、わかるようになるからうれしいです。わたしは助け合い学習はいいことだと思います。わたしは先生にもっと、助け合いの時間をたくさんとってもらいたいです。先生がこのまま助け合いの時間をとってくれればたくさんの人ができるようになるからです。助け合いの時間をとって、もっとわかるようになればいいなあ、と思いました。

もう一つは、漢字テストです。班の人があした漢字テストがんばれね、と言ってくれます。班の人が言ってくれるからあした百点をとろうという気持ちになります。だから百点をとらなきゃわるいと思います。わた



1987. 7月30日 / 12
分校小6年　上期学級

よいところ……クラスのよいところ

由子　：クラスのよいところは、勉強をわからない人がいたら、自分でおしえることです。それで、勉強を、全員がわかるようにおしえることです。それから、掃除をおそいもいるし、人の見ロをきらいもいないことです。

七恵　：クラスのよいところは、個人個人でさいしょうそうしたりしないで、口にしないことです。それに楽しい色ってでさることだと思います。学校の時間、早く終った人は、他の人に教えていっています。

正人　：クラスのよいところは、みんなを協力してあげていくことです。勉強でわからない問題があると、教えてくれたり、先生教わった人が分からない人に教えてくれたりします。

ダメ子　：私たちのクラスのよいところは、明るいところです。先生も明るいです。しゃべって、良悪の見ロや掃除をおそいとかしゃべってきたことがないところだと思います。

恵一　：しかられてもくじけないことだと思います。五年生の時は、先生におこられるとすぐメソメソしていたけれど、六年になったら、先生におこられても大丈夫。そんなことをしないで、自分をあげて、どんな人間になってきました。これからいやなことがあっても、くじけないようになることができます。

ース　：教室中で悪ふざけをしたりしたりしていると、人に対する思いやりだと思います。

のばしたい…クラスのよいところ

[illegible]　：ふつうと思うんです。掃除をおそいということ。反省会が早く、ということです。

由子　：みんなが掃除をおそくしたり、人の見ロをしたり、たいていことは数至のはそばにあるようなことと、一生懸命に先生と話したりしたり、何か教える時、くわしくていねいに教えてあげることです。

[illegible]　：このクラスのよいところは、そとなどの人げきをとりないように書くことです。

佳代美　：漢字テストと算数のスリンターのことです。漢字テストは、自分に挑戦したり、他の人たちがおしえてくれたりの「がんばろう」という強くなってくるし……それと、残りの時間のところは、おけばしてくれない人がくさいることです。算数の問題もわからない人が五人以上教えてくれます。

[illegible]　：みんながとってやさしいべきもっているということです。たのしかったりかけ、ことをしてる。みんなが、人をおしてくれたり、助けあったりしています。

[illegible]　：反省と時間を短くしたり、話をしたりして時間をしたりしたりしたいと思います。それと、あいさつも前とくらべると良くなってきたのです。あいさつもクラスのよいところだと思います。

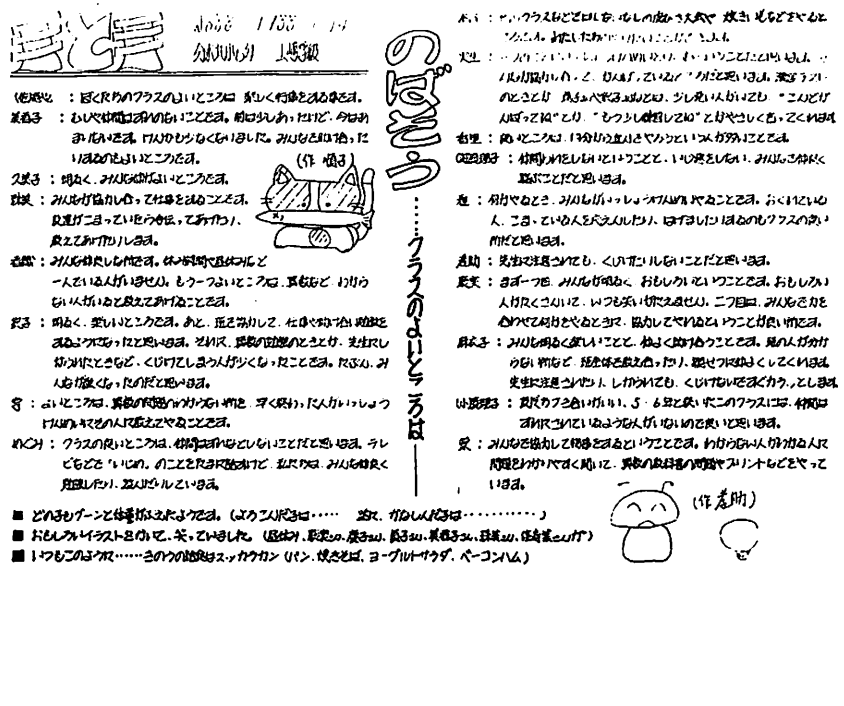
[illegible]　：みんなが協力しているところです。算数の問題がわからなかったら、教えてあげたり、そうじの早く終った人は、残っている人の手伝いをします。

しは、二学期に入ってから漢字をがんばってきました。班の人みんながいっしょうけんめいに言っているんだからがんばらなければ、と思います。」

子どもたちは様々な問題をかかえながらも「健全」であると私は思う。問題なのは、子どもをして、親をして、教師をして追いたてるものである。それをつきつめ、教師集団に自覚化させることが、今、求められているのではないのだろうか。

そのためにも、教育内容における「民主化」と、職場、教育界の民主化は不可分である。「子どもをどう見るか」ということは、「教師である自分をどう見るか＝子どもの成長を保障しうる教師に自分はなりえているのか。少なくとも数々の困難をのりこえ、そのような教師になろうと誠実に努力、苦悩しているのか」、「教師集団、学校をどう見るのか」と裏表の関係にある。

私は、職場においては、できうるか



ぎり、道理を真正面から発言するよう努力している。本音を言おうとする教師、本音が言える職場、本音を言うことが、学校全体の教育活動をより豊かにする職場……実際はどうであろうか。

「教師にただ一つ必要でないタイプの人間がいる。それは偽善者だ。」（マカレンコ）

この言葉を、今一度かみしめてみる必要があるのではないだろうか。

まとめとして

前十八号の「C君の問題」、そして、今号の「K君の怒りから」からでも明らかになったように、「私の子どものみかた」と私の実践には大きな誤ちがあった。そして、その誤ちは、単に私の反省ですむべきものではない。なぜなら、私の担任した子に否定的影響を与えるからである。「すみません」では「すまない。」――教師の仕事、もっ

と大きく言えば、人間としての教師には、それだけのきびしさが要求される。だから、誤ちをのりこえ、今、子どもたちに自分は何をしなければいけないのか、何ができるのかと、「不十分さのラセン階段」をのぼりながら、実践にまた取り組むのである。

ささやかではあるが、そのような実践の一つの「卒業パーティー」における劇での最後の子どもの言葉をのせた学級通信を紹介したい。（劇は、テーマ決定、ストーリー作り、台本作り等、すべて子どもたちの集団的取り組みによってできた創作劇「一つの赤い実」である。紙面の都合で台本＝これにすべてが凝縮されている、を紹介できないのが残念である。）

最後に、十八号の冒頭に紹介した中学入学の翌日、私に手紙をよこしたB子はその中で次のように書いている。

「……今度の新しい生徒はおこる回数が少なくていい生徒だといいですね。二日に行った時のこと、先生がのぶ子ちゃんを見つめたようなや

67人の誓いとして……

私たちは、小学校でまんだこと、とくに、五、六年の二年間でまんだことを劇にしました。私たちは、この二年間、

「自分は自分、人は人」はダメ、人のことを思ってあげるやさしい思いやりのこころもつよう、

おぼえてきました。

一年、二年生のとき は、特にしつけの面でおちついり、三年、四年生では、自分のことは自分で、努力ということをおちついり、五年、六年生では、自分は自分、人は人というあなどもだけい、みんなが助け合うということをとくにおちついました。

「自分は自分、人は人というあなどもだけい、みんなでは助け合い、ともにきをとりあって進んでいく。」

ということです。どんな場合でも、この気持ちはかんたんではいけないと思います。

この六年間、苦しかったこと、やだなあ、と思ったことがたくさんあります。この二年間でも、らくがきをされた人、くつをかくされた人などがいました。

――やっぱり、みんなで助け合うという気持ちがたりなかったからだと思います。

自分一人でがんばっていけるくもいれば、みんなで支えあわなければいけない人もいます。自分一人でがんばろう、このできる人は、自分だけ、自分だけという考えが決してないとはまちがいなかったと思います。だから、わかりない人にしんぱいをするきっかけ作りをしたりすることもあったんだと思います。

みんながこころを一つにして協力しあえば、はげんだりすることもなくなるし、あの

さしい目でいられる生徒だといいですね……。」

（卒業後、春休みに、卒業記念として、ほとんどの子が二日に分かれて、寺泊の私の家まで遊びにきた。のぶ子とは当時、一才半になった私の二番目の子どものことである。）

自分の子どもを見つめるようなやさしい目で子どもたちを見ていなかった私……。

もう二度と、このような誤ちをくり返してはいけない。

どんなに忙しくても、追いたてられようとも、苦しくても、

「のぶ子を見つめるようなやさしい目」

で、今担任している四年二組の二十八人の子どもたちを見つめているのか、日々、自問している。

（やまざき　とおる＝西蒲原郡分水北小学校）

No99　1988.3.23
分水北小6年　上野学級

人をみならってがんばっていこうと思う人がたくさんふえると思います。

わたしたちは、どんな知恵でも、わからない人がいないように、みんながなっとくをしてからつぎに進んでいます。

自分だけわかればいい、ということは本当にわかっていない、みんながわかってからはじめてわかったんだといえると思います。

みんなで何回もテーマについて話し合い、ありすじを考え、二回も台本づくりをしてから成しとげます。意見を出し合い、全員で考え、できたと思います。

私たちがとくにきんぱいだと思いやりというこがわかっていたからだとしょうか。思いやりげ相手にフラジルだと相手も思いやりということをわかってくれると思います。

私たちはもうすぐ中学校へいきます。楽しいこと、苦しいこと、困ったことなどがたくさんあると思います。

自分のことばかり考えずに、人のことを思ってやるやさしいこころもって、みんなで助け合い、はげまし合って中学校でもがんばっていきたいと思います。